京都府立大学学術報告（人文・社会）第58号　（2006年12月）

世界一の帝国首都は二流のみやこ
―ナポレオン戦争後のロンドンにおける矜持と不安の言説，および明治期京都への視点

野　口　祐　子

はじめに

イギリスは1805年にトラファルガーの海戦でフランス・スペイン連合艦隊を破り，1815年にベルギーのワーテルローでウェリントン将軍率いるイギリス軍とビュルヒャー率いるプロイセン軍がナポレオン軍を破った。これらの勝利によってイギリスは，フランスを海上支配から敗退させ，政治・経済上ヨーロッパの第一国のみならず世界一の強国の地位を確立した。

ロンドンは長らくパリをライバルとして意識していたが，ナポレオンの都市改造によって近代的首都の洗練と帝国首都としての威容を備えつつあったパリに対しては，引け目を感じていた。しかし戦勝に勢いづいたロンドンでは，世界一の首都であるという自己イメージを国内外に打ち出す機運が高まった。それには時の国王ジョージ４世の派手好みと新築・改築好きが大いに影響している。パリへのライバル意識についてデイナ・アーノルドはこう指摘する。

> ロンドンとパリの間には，絶えず文化・社会そして建築上の対話が続いていた。1800年代から40年代にかけて近代的なメトロポリスそして大英帝国の首都が誕生した時代に，パリは眼前のライバルと見なされた。ジョージ４世は「自分が計画しているロンドンの改造によってナポレオンの華やかなパリもかすんでしまうだろう」と言ったと伝えられる。1814-15年にパリを訪れた国王の筆頭建築家ジョン・ナッシュは，ナポレオン１世が拡張した直線のリヴォリ通りの，アーケイドや店舗と住宅からなる景観に感銘を受け，彼自身が数年前に計画したリージェント通り―ブルジョア都市空間の頂点を極める計画―をヨーロッパ大陸モデルに従って創るべきだという確信を得た。（Arnold, *Re-presenting the Metropolis*, 26）

パリをモデルにロンドンを改造し，見た目もヨーロッパ第一の都市にする野望である。この野望は後に論じるように，ロンドンの政治形態，土地制度，人口集中，流行の変化，そしてロンドンのイメージの不確定性といった原因のため，実現をみないものが多かった。リージェント通りやリージェンツパークなどの，ロンドンが誇った開かれた大通りと公園とモニュメントからなる都

市空間は，1852年以降，今度はロンドンで亡命生活を送っていたナポレオンの甥がフランスで皇帝の座についた際，彼のパリ大改造のモデルとなる。ジョージ4世が計画していたロンドン改造は中途で頓挫したものが多かったが，ナポレオン3世（在位1852-70）のパリ改造は，ロンドンの改造をはるかに凌ぐ規模で短期間に行われた。ロンドンの都市景観の美点とともに，ロンドンの短所，ロンドンが実行できなかった計画，失敗した点が彼の改造計画に先達として役に立った。こうして，パリを顔色なからしめるというジョージ4世の夢はかなわぬものとなったのである。

この小論は19世紀の前半，つまりナポレオン戦争後にイギリスが大英帝国として急速に繁栄していく時期を主に扱う。この時代は，ロンドンの見栄えをどうにかして改善しようとする王室や政治家や建築家，ロンドンの都市景観を論評するジャーナリズムのそれぞれが，ロンドンのイメージはどうあるべきかを熱く語った時代であった。

19世紀初期のイギリスでは，ナショナリズムのイデオロギーに支えられたロンドン・イメージの刷新が図られた。それをロンドンの「再イメージ化」と定義するアーノルドによれば，

> 19世紀初期のロンドンにおける再イメージ化は，ロンドンの住民にも外からの訪問者にも大きな印象を与えた。一国の首都から帝国の首都への変容の背後にあるイデオロギーは，特に国民とナショナリズムという概念に関わって，ロンドンを自意識的に創造された芸術作品として，あるいはテクストとして読み取ることを促す。(Arnold, *Re-presenting the Metropolis*, 43)

"British Empire"という表現は，*Oxford English Dictionary*によれば早くも1604年に見られるが，大ブリテン（イングランドとスコットランドの連合）のアイルランドとの連合（1801年）とナポレオン戦争の勝利を契機に，広く使われ出したものと思われる。エッセイストのG. G. ストンストリート（G. G. Stonestreet）は大ブリテンとアイルランドの連合，これは事実上の併合だったが，それを機会に「大英帝国の首都」（強調原文）「ライバルたちの羨望の的」「世界の称賛」の対象となるべき都市として，ロンドンは「その威厳と富と人口と大きさにふさわしい姿を取らなければならない」と説いた。そしてロンドンのパブリック・イメージを帝国首都にふさわしいものにできる条件はそろっていることを強調する（「状況と能力の点では最高に有利なのだが，ロンドンに相応しい光輝と都市整備を備えさせるには，まだまだしなければならないことがたくさんある」）(Stonestreet 3)。

この文章からは，ロンドンが大英帝国首都であることの自負心と，その地位に外見が追いついていない現状へのもどかしさが感じられる。

ここに見られるように，ロンドンのイメージをどう構築するかについて，この時代の言説から読み取れるのは，世界第一の都市であるという矜持と同時に，建築や都市景観においては二流であるという自信のなさと，ロンドンのアイデンティティを何に求めるかという問題への揺らぎで

ある。

この小論では，特に19世紀初期のロンドンのイメージについて，矜恃と不安という一見相矛盾する感情が表明されたことに注目する。第1節では，当時の言説の幾つかを分析することによって，ロンドンの首都イメージに関する集団的意識を明らかにしたい。それに関連して第2節では，当時のロンドンに関する言説に表れる古代ローマ帝国のイメージを考察する。古代ローマのイメージは「何をもって正統とするか」という，ロンドンのイメージ構築を考える上で重要なテーマとなるからである。この「何をもって正統とするか」という問題と，首都イメージに関する集団的意識という問題は，京都の「みやこのイメージ」を考えるうえで有効な視座を提供してくれる。第3節では，ロンドンのイメージ構築について得た知見をもって，明治期の京都イメージを考察したい。

1　ロンドンのイメージに関する言説に表れた矜恃と劣等感

ローマへの憧れ

橋はヨーロッパにおいては記念碑的デザインの一つと捉えられ，18世紀イギリスの建築教育の中で重要な位置を占めていた（Arnold, *The Metropolis and Its Image*, 85）。建築家ジョン・ソーン（John Soane, 1753-1837）は，ロイヤル・アカデミーの学生時代に，ローマ風凱旋橋のデザインで金賞をもらってイタリアに留学する。ローマの都市美の洗礼を受けて戻ってきたソーンは，1806年にロイヤル・アカデミーの教授に就任し，連続講義を行う。1788年から1826年までの長きにわたってイングランド銀行の増改築を一手に手掛けたソーンはまた，ロンドンの都市開発事業に関わる建築家として，ジョン・ナッシュ（John Nash），ロバート・スマーク（Robert Smirke）とともに政府に選ばれる名建築家であった。しかし17年間の任務の間，彼の都市改造案は日の目を見なかったものも多い。連続講義の中で彼は繰り返しロンドンの現状を嘆き，ロンドンを「第二のローマ」に変えるべきだと説いた。まずここではソーンの講義の言説を分析することによって，ソーンがロンドンに抱く矜恃と不安，ソーンの首都観を支える理想の首都のイメージを明らかにしたい。

連続講義の第11回を，ソーンは「イギリスでは建築がなおざりにされている」という嘆きから始める。

> 前回の講義では，我が国の公共の建物にしかるべき注意が払われていないことを指摘しました。それに劣らず嘆かわしいのが，この偉大な首都，この富の中心地において，国家の偉大さを表す公共の記念碑があまりにも少ないことです。まるで建築というものが注意を払うに値しないものだと一般に考えられているようです。ギリシャやローマではそうではありませんでした。（第11回講義　1815年3月16日。Watkin 637）

古代ギリシア・ローマを理想とするソーンにとって，イギリスの現状はその理想からの堕落でしかない。続いてロンドンの景観の貧しさを嘆くソーンは，パリと比較し，外国人のジョークを持ち出して「外からのまなざし」に注意を向けさせる。つまり海外からロンドンがどう見られるべきかという視点が重要であることを説く。パリとロンドンの宮殿を比較して，ロンドンの宮殿は大英帝国にふさわしくないと断じる。

> ルーヴルやチュイルリーやヴェルサイユを見ればお分かりの通り，それらの宮殿は優美な形に満ち王侯に相応しい壮大さを備えていますので，外国人の心に強い印象を与えずにはおきません。これらの真に王宮らしい宮殿と，セント・ジェームズ宮殿やバッキンガム宮殿を比較すればお話になりません。我らが王侯貴族の住まう建物は，我が国の建築の名誉となるものではありません。グリニッジとチェルシーの廃兵院を見て次のように言い放った外国人の皮肉な発言もその通りと言わざるを得ないのです。すなわち「イギリス人は船員や兵士を宮殿に住まわせて，王侯たちを廃兵院に住まわせるんだね」。（第11回講義　1815年3月16日。Watkin 637）

ここでソーンは愛国主義的にロンドンの貧相さを憂えているのだが，この箇所からはそれ以上のことが読み取れる。グリニッジ・ホスピタルはもともと，クリストファー・レン（1632-1723）がメアリー女王とウィリアム3世の宮殿として設計したが，1694年の女王の死後，海軍廃兵院として完成した。ソーンはこのジョークでイギリスが誇る1世紀前の建築家レンに敬意を表すると同時に，宮殿として構想された一連の建造物が，建設途中から別の用途として完成させられるという，いかにも一貫性のないイギリスの都市計画らしい例として，多分の皮肉もこめていると思われる。だがそれだけではない。実はジョークに便乗して，ちゃっかり自分の作品を自慢して点数も稼いでいる。というのもソーンは1807年から陸軍用の王立チェルシー廃兵院の増改築を任されていたからである。

ソーンは，古代ギリシャ・ローマの時代に花開いた芸術としての建築が，現代の経済性と悪趣味の犠牲となって堕落したことをたびたび嘆いて見せる。

> このように芸術家の気高い情熱と繊細な感性はしばしば，注文主の側の，熱意を冷まさせるような吝嗇と無思慮な倹約，あるいは悪趣味などによって抑圧され息の根を止められ，麻痺させられるのです。おお，建築よ！かつては偉大な中にも偉大であった建築よ！汝，諸芸術の中の美わしき女王よ！ペリクレスやアウグストゥスの時代から何と堕ちたことよ！（第8回講義　1815年2月23日。Watkin 594）

この連続講義の前年1814年には，イギリス軍がナポレオンを破ってエルバ島に流し，さらに1815年の3月にナポレオンがエルバ島を脱出し皇帝として復活すると，同年6月にベルギーの

ワーテルローで破って最終的にナポレオン・フランスの野望を挫いた。ちょうどその時期に行った講演であることを考えると，首都を国家の顔として恥ずかしくないものにすべきだというソーンのメッセージは，当時の愛国主義を掻き立てられた聴衆の耳によく届いたことが想像される[1]。1805年のトラファルガーの海戦で戦死したネルソンを，国民の英雄として讃えるモニュメントを建てる計画が練られている最中でもあった[2]。

ソーンの講義には，当時の都市計画に携わった人間が身近に感じた大英帝国の権力の増大と，それがみやこの形となって十分にロンドンのイメージ・アップにつながらない苛立ちが現れていると言える。

ガイドブックに表れた矜持と劣等感

ソーンの苛立ちは19世紀半ばになっても知識人階級の共通言語であった。たとえば1854年に出版された事典形式の大部なロンドン紹介本である『挿し絵付きロンドン案内書』（*Pictorial Handbook of London*）で 'Bridges' の項を引くと，以下の説明文に出くわす。

「橋」

我らが首都において，テムズの広い川幅をまたぐ橋を芸術品とみなすにしても，我が国の最新技術が結集したものとみなすにしても，それらに比肩できる建造物はほとんどない。

外国人はよくテムズに架かる橋の数の少ないことに驚く。確かにセーヌ川に架かる夥しい数の橋と，我らが川のまばらにかかる橋とは対照的だ。

（*Pictorial Handbook of London*, vol. 1, 274）

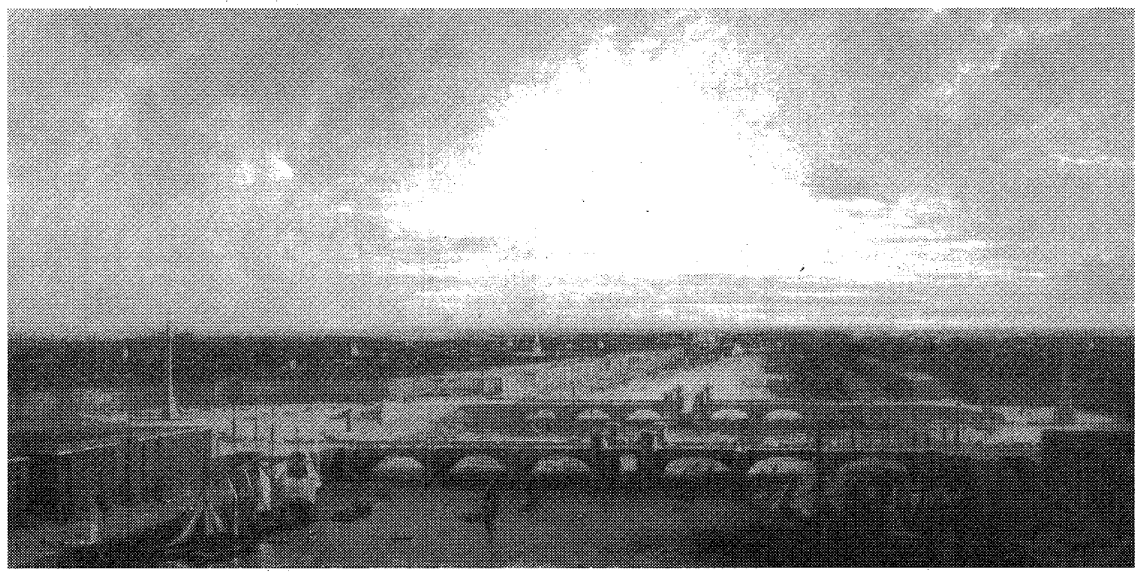
誰によって書かれたものかは特定できないが，この執筆者はロンドンの中心部を流れるテムズ川に架かる橋が，芸術的にも技術的にも首都の建造物の中で比類ないものであると称揚しながら，同時に橋の数でパリに負けていることを気にしている。帝国首都に対する外国からのまなざしを意識している。この後の箇所でも，セーヌ川にはテムズの半分の距離にほぼ倍の数の橋が架かっていることを引き合いに出している。しかしそれに続けて，橋の数は少ないが，川幅と水深が違うのだから，テムズの橋のほうが費用と技術的困難においてうんと優っているのだと述べる(274)。費用と困難において「優る」とは妙な自慢に聞こえるが，ここに長年のパリに対する劣等感を克服したい心理を読み取ることができる。

この劣等感とライバル意識は，ひとりこの執筆者のものではない。同時代のシティの議員は，セーヌ川に580ヤード間隔で橋が架かっているなら，パリの人口と比較すればテムズ川には少なくとも44本の橋がなければならない，と嘆いたというエピソードが紹介されている（Barker & Hyde 39)。バーカーとハイドの*London As It Might Have Been*は，18－19世紀にロンドンで実際に架けられた橋が，タワーブリッジを除いて，技術上の偉業ではあっても記念碑的壮麗さに欠けている，つまり「常に美が利便性のために犠牲にされた」（"Beauty is invariably sacrificed to

utility," Barker & Hyde 39）と指摘する。そこで彼らが示してくれる，実現しなかった橋の荒唐無稽なまでに華麗なプランの数々は，利便性を度外視して橋を首都の記念碑的芸術作品にしようという意欲に貫かれていた。それらのプランの多くは工事費用と周辺の土地買い上げ費用が調達できないために，図面段階で消えたり，あるいは基礎工事まで至りながら政府の命令で中止に追い込まれたりしている。ここではそのうちの典型的なデザインと，それがたどった運命を考察しよう。

ロンドン橋は13世紀から600年も使われ，ロンドンのシンボルとなっていたが，18世紀には交通量の急激な増大もあって急速に老朽化が進んだ。先に触れた『挿し絵付きロンドン案内書』「橋」の項の執筆者は，架け替え前のロンドン橋は「航行の邪魔になるだけでなく，ロンドンの建築の面汚しと非難された」と書く（vol. 1, 274）。19世紀初頭から具体化へ向けて動き出したロンドン橋の架け替えには，当時有数の建築家たちが，巨大で装飾性の高い記念碑的なデザインを発表した。

なかでも興味深いのが，ソーンの師匠であるジョージ・ダンス（George Dance the Younger, 1741-1825）が1800年に発表した二本橋案である。大きな船がロンドン橋より上流に航行できるように，しかもその間も橋の通行を止めないで済むように中央部分が開閉する2本の平行する石橋として考えられた。



William Daniell, 'View of London with the Improvements of the Port,' as suggested by George Dance the Younger, c. 1800. © Guildhall Library.

二本橋の贅沢と利便性への配慮もさることながら，際立っているのは両岸に広がる景観の豪華さである。テムズ北岸には，レンの設計で1677年に完成した，ロンドン大火（1666）を記念するその名も「モニュメント」という塔が建っている。シティのそのあたりは建物がぎっしり詰まっていたのだが，ダンスの案では，新橋の北岸にはその塔を真ん中に据えた広大なローマ風広場を設け，南岸には，これまたローマ風にオベリスクが中央に建った広場を設ける。いずれの広場

も，周囲を均一の高さの建物が取り巻いて，古代ローマだけでなく，同時代のパリを意識した都市景観を見せている。ダンスが祝祭的都市空間を創りたかったのがよく分かる。

ダンスの案は国会の委員会で評価されたが，結局金がかかりすぎるために，それも橋を2本造るからというだけでなく，シティの土地を買い上げるのが困難なために実現しなかった（Barker & Hyde 44-45）。ロンドン橋案には，他に斬新な鉄橋のデザインなども提案されたが，紆余曲折の末，30年後に結局はシティの土地を犠牲にする必要のないシンプルなデザインの橋が架けられた。

しかもロンドン橋の架け替えには，ロンドン西部のウェストミンスターにある政府と東部にあるシティの権力の攻防があった。この2つの力の存在が，ロンドンの特色であり問題でもあった。ロンドン橋の架け替えは，首都全体の交通網と景観の整備という観点から，政府によって構想されていたが，シティの議会は政府の構想に与しなかった。結局はシティの歴史を具現する橋として，新ロンドン橋の建設はシティの議会が主導権を握った（Arnold, 'London Bridge and Its Symbolic Identity in the Regency Metropolis' 79-100）。経済の中心地にふさわしい橋として，装飾過多のデザインが排されたのも，シティのアイデンティティを表すものと言える。

このロンドン橋案とその顛末にも，当時のロンドンが抱えていた問題が典型的に表れている。すなわち，帝国首都に相応しい都市景観を創りだそうという意欲が，絶えず都市デザインにおける一貫性の欠如と経済性優先と，土地買収の困難さ，そして政府とシティの間で首都観に意見の一致を見ない，などの要因によって挫かれるという，まさにソーンが嘆いた通りの図になっているのである。

もし当時のロンドンにパリ大改造を断行したオスマンのような大臣がいて，建設費も土地買収も強引に解決してダンスのロンドン橋を実現させていたらよかったというつもりはない。議会の力が強いために，またシティとウェストミンスターの力関係を反映して，統一的な改造ができなかったことが，みやこのイメージとしてマイナスだったと単純に割り切ることはできない。みやこのイメージは，都市景観だけでなく，成熟した議会制民主政治の存在によっても形作られるものだからである。ロンドンの中心部の景観がパリに比べて統一感を欠く結果となったことも，それ自体がロンドンの多様性の形であり，また政治と行政の形として判断評価されるべきだろう。

ただし19世紀の人々は，そう思えなかった。『挿し絵付きロンドン案内書』の「公共および私的建造物」の項にも，たとえばハイドパーク・コーナーの整備が二転三転したことに対する執筆者の苛立ちが読み取れる。対ナポレオン軍勝利を記念するウェリントン・アーチがハイドパーク・コーナーに造られたのが1828年であった。ワーテルローの戦いからすでに13年も経っている。このモニュメントは古代ローマの凱旋門をモデルにしているが，ナポレオンが自らの栄誉を視覚化すべくチュイルリー宮殿の入り口に造らせたカルーゼルの凱旋門（1808）の向こうを張っているのは明らかだ。ウェリントン・アーチにはその屋上や上部に華麗な装飾が施される予定だったが，費用がかさむために断念された。その後，当初のデザインを無視して巨大なウェリントンの騎馬像が上に載せられて，その門とのバランスの悪さを批判された。このガイドブックの執

筆者は，当初の計画と完成作の間に一貫性がないことが，ロンドンの建造物の特徴だと手厳しい。

> その彫像の出来栄えは措くとして，建築としてのみ見ても，とてもバランスが良いとは言えない。アーチの完成形が必要とするピラミッド型の姿には頭でっかちすぎるし，はじめの意図から変更された建築作品につきものの継ぎはぎ感が紛れようもなく感じられる。このように途中で計画が変更されたために，ちぐはぐの建物ができあがるというのは過去200年間イングランドの建築が絶えず経験してきたことだ。(*Pictorial Handbook of London*, vol. 3, 705)

執筆者は，イギリスの特徴であるこの統一感と一貫性のなさが最もよく表れているのが，このハイドパーク・コーナーだと続ける。

> この我が国の，そしてこの時代の特色が最も顕著に現れているのがハイドパーク・コーナーである。この地点は首都に入る唯一の装飾的入り口として機能すべき場所であるから，他国なら全体の統一性へ配慮が向けられるはずであるが，そして（壮大か貧弱か，派手か簡素かはともかく）少なくとも二つの公園の入り口に何らかの統一感か対称性を持たせるだろうが，我が国ではそれぞれの入り口すら統一感のある仕上げができないままである。(*Pictorial Handbook of London*, vol. 3, 705　強調原文)

ハイドパークからハイドパーク・コーナーを通ってグリーンパークに入り，バッキンガム宮殿へと続く格式あるアプローチとなるはずの，重要なルートの整備がこんなにもお粗末でよいのかというこの公憤も，橋の場合と同様ロンドンへの国外からのまなざしを意識している。首都のイメージアップの必要を痛感している執筆者のもどかしい思いが伝わってくる。

これまで見てきたように，世界一裕福な都市であり，その富と覇権に見合う首都の威容を誇れるような姿へと改造するのが急務であるとの言説が広まったにもかかわらず，19世紀前半のロンドンでは改造計画および記念碑的建造物の建設が頓挫することが多かった。その背景には，

1．議会制政治で都市計画を実現していく過程で，しばしば計画が変更されたこと。独裁的イニシアティブを取る人物の意志が反映されにくかったこと。
2．政府とシティ間の権力の攻防と，首都観のずれ。
3．すでに開発が進んでいた首都中心部の再開発には多額の土地買い上げ資金が必要となること。
4．都市の美化のための再開発で経済的損失を蒙る商工業者の反対にあうこと。
5．国家予算をロンドンという一都市のためだけに使うことへの反対が，地方の意見を代表する議員たちから表明されたこと。
6．中産階級に，質素と倹約こそが美徳であり，奢侈と散財は悪徳であるというプロテスタント的市民道徳がゆきわたっていたこと。つまり豪華な建物や派手な装飾は必要ないという考え方。

など，多様な理由が考えられる。

建設をスムーズに進められない原因が様々ある中で，ロンドンの帝国首都としての統一感あるイメージを構築することは困難であった。19世紀のガイドブックに表れるロンドン・イメージへの自信のなさについて，ギルバートは次のように指摘する。

> ロンドンのガイドブックのなかには，名所観光よりも体験型の観光に重点を置くものもあった。これはおそらく，ロンドンが他のもっと「帝国的」なヨーロッパの首都と比べて，視覚的に優れているかという点に不安や疑念があったからだろう。(Gilbert 2)

この節で見てきたように，ソーンの講義やロンドンのガイドブックには，ロンドンを他のヨーロッパ都市と絶えず比較せずにいられない強迫観念が表れている。ロンドンは世界一のみやこなのだ，あるいは，ロンドンはイギリスのみやこらしいみやこだ，と言って泰然としていられないのは不思議なほどだ。次節では，この心的傾向の出所について考えてみたい。

2　みやこ性確立のためのイメージ戦略

何をもって正統とするか

前節で見た広場・街路・記念碑とそれらの案に見られるように，19世紀初期における都市改造のヴィジョンには，パリと，パリが手本としたローマが強く意識された。フランスを破りヨーロッパの経済的覇者となったイギリスは，ヨーロッパ大陸から離れた一島国ではなく，ヨーロッパの中心的国家であるという国家観が強まった。ヨーロッパの中心的国家であることを国内外に示すには，汎ヨーロッパ文化の伝統を受け継いでいることを，見た目に分かるように表現する必要があった。ダンスの華麗な二本橋案やソーンの宮殿改築案をはじめとするロンドン改造の夢は，一建築家が自らの理想を具体化しようとした個人的な夢にとどまらない。19世紀初期のイギリスが，自らの文化的起源を古代ギリシャ・ローマという，当時汎ヨーロッパ文化の正統と見なされた文化に位置づける努力のあらわれでもあったのだ。この努力が言説化されたもののひとつが，ソーンのロイヤル・アカデミーでの連続講義だった。見方を変えれば，それらの努力は「自らが中心でないことへの不安」から出ていると言える。

ソーンたちが思い描いたほどには実現しなかったが，都心部の公園やその周縁に配されたローマ風の建物や記念碑・偉人像が首都の威厳を視覚化していった。そしてそれらを目にするのは，大英帝国と古代ローマとを重ね合わせることのできる教養を持った人々であった。ローマ的なテーマでロンドンの空間が変貌していき，ロンドンをローマと比較する言説が繰り返されると，彼らの集合的意識に日常のロンドンが古代ローマと結びつけられて，その関係が，過去から連綿と続く伝統として認識されるようになる。また彼らの意識形成には，1790年のイギリス南西部の都市バースでの発掘により，古代ローマの遺跡が身近なものになったこと，その頃からの考古学

ブームによって，19世紀のはじめにはイギリスの地に残る古代ローマ遺跡への関心が高まったことも一役買っているだろう。

このように，古代ローマは19世紀イギリスの伝統として移植され，ロンドンに世界の中心である「新しいローマ」というイメージを与えるために，王室や政府関係者，そして都市改造に携わる人たちによって多分に意識的に利用されたのである。

「新しいローマ」としてイメージされたロンドン

「新しいローマ」というイメージは，19世紀になって突然現れたものではない。1660年のチャールズ2世による王政復古後には，ピューリタン革命から続いたイギリス国内外の流血の時代が終わり，古代ローマのアウグストゥス帝（27 BC-AD 14）の治世に実現したような平和な時代が訪れたのだ，という華やかな雰囲気があった。古代ローマ人姿のチャールズ2世像が建てられた。アウグストゥス帝時代（英語では「オーガスタス」）はヴェルギリウス・ホラチウス・オヴィディウスといった優れた詩人が輩出した時代であり，彼らを師と仰ぐイギリス詩人たちは‘Augustan Poets’と呼ばれた。文学をはじめとする文化・芸術の洗練を自認するこの「オーガスタン」時代に，ローマ帝国とイギリスが重ねられたのだが，それは文学の洗練と植民地の拡大が同時進行していた点でも重なるものであった。

> アメリカ大陸と，アレキサンダー大王やポンペイウスがかつて勝利を収めたアジアを大英帝国が植民地として獲得すると，自国を古代ローマに喩える自己賛美が助長された。ジョージ2世はジョージ・オーガスタスと命名されたし，ハノーヴァー王朝の太ったドイツ系イギリス国王の像が，ローマ皇帝の姿を取って公共の場に飾られた。それらは1世紀後に，サッカレーのような不敬なヴィクトリア朝人に笑われることになるのだが。(Vance 12)

ダンスのロンドン橋案をもう一度見てみよう。この図で興味深いのは広場が与える視覚効果であった。ダンスの広場は，橋が架けられる場所であるシティのための広場というよりは，古代ローマのように帝国の威容を視覚化する空間装置と考えられる。確かにロンドンには，このような機能を果たす装置が欠如していた。広場やヴィスタの開けた街路は，近代都市の増大する交通量をさばくのに有効であるだけでなく，国王の行幸や軍隊の行進などの儀式を効果的に行うために必要であった。

そのような空間装置として考えられた典型的な都市改造案が，ソーンによる「国王行幸路」である。先述のガイドブックにもあるように，現実には19世紀半ばになってもハイドパーク・コーナーの整備もままならぬ状態だったが，ソーンは1810年代から，首都への公式入り口と広場，そして王宮と政府所在地を結ぶ公式ルート案を温めていた。彼はハイドパークからハイドパーク・コーナーを通ってグリーンパークに入り，バッキンガム宮殿から政府所在地のホワイトホールへと国王が行幸するルートを，広いヴィスタと華麗なモニュメントで装飾する案を主張した。

ジョージ4世がその肥満体のために長時間歩けないことを配慮して，国王の休憩場所まで組み込まれた計画であった。ソーンの頭には首都ロンドンの顔を整備する夢と同時に，国王の威厳を視覚的に高めたいという国王自身の意図も反映している（Richardson 254）。

ソーンの国王行幸路については，彼のデザイン画を長年手がけたジョセフ・ガンディ（Joseph Gandy, 1771-1843）による美しい水彩画が幾つも描かれた。ガンディの水彩画に描かれたロンドンは現実のロンドンとは別の世界であった。煙突も雑踏もなく，建設途中なのか，すでに崩れた廃墟なのか判然としないモニュメントに満ちた彼の絵は，ロンドンをローマに仕立てあげた。それも現実のローマではなく，すでに遺跡となった古代ローマである。人々の営みが感じられないガンディの絵の中で，建築のみが生き残っている。新しく建てられるものも崩れたものも建築として同じ地平にある。それらは大英帝国の顔を古代ローマという理想の顔に整形するヴィジョンであった。しかし現実のロンドンの喧騒が死に絶えたかのようなガンディの絵の静寂は，古代ローマの滅亡と大英帝国の滅亡を，想像力によって重ね合わせる手助けをするがゆえに，不気味でもある。事実ガンディもソーンも当時流行した「廃墟の美」に取りつかれていた。ガンディは，古代ローマというテーマが持つ二面性を視覚化した画家と言える。

ガンディの絵は，繁栄と衰亡，永遠とはかなさを二重写しにする。それは大英帝国の歴史を透視するヴィジョンとも見える。しかし当時は，現実のロンドンではかなえられない理想図として受け入れられた。王宮を中心とした壮麗な祝祭都市というのは，ロンドンのイメージとして実現不可能だった。それは物理的に不可能なだけではない。ロンドンのイメージとしてふさわしいかどうか疑問視されたのだ。

王権中心から都会性中心のイメージへ

前述したように「大英帝国」という呼称は，19世紀初期から，古代ローマ帝国のように海外に植民地を持ち海上覇権を握ったイギリスでは頻繁に用いられるようになる。しかし国内における帝国の実態は，強大な権力が皇帝に集中する独裁政治ではない。だから例えば，ジョージ4世がナッシュにやらせたバッキンガム宮殿（1821-30 改築）の改築費用を中途で財務省が打ち切るというような事態が頻繁におこった。ロンドンが豪華さに欠けるといっても，国会では経済効率の議論が優先される国だったから，国王のやることでも目に余る贅沢と判断されれば認められなかったのである（Halliday 26-31）。

つまり，国王行幸路案に見られるような，ソーンが目指した王権中心の首都改造構想は，中産階級の都市となっていたロンドンでは受け入れられなかった。ソーンはイングランド銀行の増改築に長年携わり，シティが一国の経済の中心地から世界の中心に変貌していく時代を共にした。しかし彼のウェストミンスター地区における国王行幸路構想には，市民のための空間という視点が欠落している。

ここにロンドン・イメージのひとつの特徴が見て取れる。『挿し絵付きロンドン案内書』の冒頭ではロンドンが次のような言葉で紹介される。

ロンドンは世界で最も大きく最も富み，最も人口の多い都市である。ロンドンは自由の中心であり，偉大なる帝国政府の所在地であり，勤勉さと平和の諸学を実務に応用するにたけた能力ある人々が世界のあらゆるところで活躍し，世界の道徳上，政治上進むべき道を示すに計り知れない影響力を行使している民族のメトロポリスである。(*Pictorial Handbook of London*, vol. 1, 1)

園田英弘氏の定義に従えば，完全な「みやこ」とは，首都性（一国の首府の所在地）・王宮性（王宮の所在地）・都会性（人口の集中，経済・文化の中心）の3つの条件を備えた都市のことである（園田25)。この定義によれば，ロンドンは完全なみやこと言える。しかし上のガイドブックの執筆者には，ロンドンの「王宮性」は頭になかったようである。

ソーンが目指したのは，「王宮性」を中心としたみやこのイメージアップであった。連続講義でも，パリに比べてロンドンの宮殿が見劣りすることを強調していたのは見た通りだ。ロンドンのガイドブックが「王宮性」に言及しなかったのは，ソーン同様，宮殿が自慢できるものではなかったからか，それとも「王宮性」がロンドンのイメージにさして重要でないと考えていたからか。ちなみに「公共および私的建造物」の項で「バッキンガム宮殿」の説明を読むと，改築を手掛けたナッシュの無計画を厳しく批判している。そればかりか先々代の国王についても容赦ない(「ジョージ4世は国会を欺いて改築費用を出させた。そうでもしないと，まともに要求しても予算がつくはずがなかったからだ」(*Pictorial Handbook of London*, vol.3, 748))。結果としてバッキンガム宮殿は惨めな姿を晒したので，再改修されたものの，見学するならナッシュの手掛けた部分は素通りすべきだ，などと忠告する。ここでもロンドンの建築の現状が嘆かれている。

完成したと思えば（今日の全てのイングランドの建築がそうであるように)，失敗作だと宣言される。我らが祖先の建築の才が暗黒時代以来卓抜であったにも関わらず，今世紀も半ばを過ぎたが，完成後20年たっても笑いものにならないような建物を建てられるのだという証拠をなんら生み出していないのだ。(*Pictorial Handbook of London*, vol. 3, 749)

現にヴィクトリア女王が使用しているバッキンガム宮殿を建築の失敗作の典型として例に出し，その失敗の原因の一端が前々国王にもあるというのである。王室がロンドンの中心性を持つと認識されていないのは明らかだろう。

19世紀半ばのロンドンには当然王室を頂点とする社交界があった。またヴィクトリア女王は国民の道徳モデルとなった。しかし中産階級を対象とするガイドブックが印象づけるロンドンのイメージは，「首都性」と「都会性」である。それらのイメージを打ち出すためには，ソーンのように古代ローマのイメージに執着する必要はなかった。

みやこのイメージ戦略における変化

『挿し絵付きロンドン案内書』冒頭の続きを読めば，このガイドブックが当初は1851年にロンドンで開かれた第一回万国博覧会を機に書かれたことが分かる（「まもなく最高に道徳的重要性を持った行事の会場となるからには，我らが巨大都市に馴染のない人々も，その組織や構造，貿易や商業，社会的・政治的偉大さ，外見だけ見ても分からない多くの文化財についての知識を得ておくのが望ましいと考える」*Pictorial Handbook of London*, vol.1, 1)。この万国博覧会が大衆の旅行ブームの起爆剤となって，博覧会目当ての旅行者向けにロンドンに関する40種類以上のガイドブックが出版された（Gilbert 16)。

『挿し絵付きロンドン案内書』で取り上げられるのは，アルファベット順に“Almshouse”（救貧院）から始まって，“Water supply”（浄水設備）までである。つまりロンドンの地理的・階級的な上層も下層もひっくるめて知識と見学の対象となるのである。このガイドブックが910ページもあること，しかも事典形式で書かれていること自体が，何よりロンドンの多様性を体現している。都市のあらゆる構成要素を網羅することによって，そのそれぞれが際立っている「大都会」としてのロンドンのイメージが強調されているのである。

このように，首都の威厳の表現として志向されるイメージは，19世紀の半ばより古代ローマの嫡子という位置づけから変化していく。

一つの方向は，産業革命をいち早く推し進めた国として，先進性にアイデンティティを求める方向である。それは都市景観においては，鉄橋や鉄道・地下鉄，万国博覧会の会場として建てられた鉄とガラス製のクリスタル・パレスなどの，先端技術による都市改造という姿を取った。ロンドンの特徴とは新しさにある，科学技術と経済力がもたらす活気にあるという考え方である。すなわち，ロンドンが統一された外観を持っていないのは，劣っているからではなく，人口が集中した富める都市だからであり，その先進性と活気こそがロンドンの魅力なのだという。そしてまさにロンドンの先進性と活気を視覚化したものが，1851年の万国博覧会であった。

もう一つの方向は，イギリスの伝統的な文化を，古代ギリシャ・ローマ文化の継承とは別のところに見出す立場である。たとえば建築様式では，古代ギリシャ・ローマ風が19世紀前半に流行した後，ゴシック様式がイギリス固有の様式であるという考えが主張された。ゴシック様式はもちろんヨーロッパ大陸に広く見られるが，ローマ風古典主義への反動として現れ，“the Battle of Styles”（様式間の戦い）と呼ばれるせめぎ合いが続いた。現在ビッグ・ベンの愛称でその時計塔が知られるウェストミンスターの国会議事堂は，チャールズ・バリー（Charles Barry, 1795-1860）の作（1840-60）であるが，1835年に政府がそのデザインを公募する際には，「ゴシック様式またはエリザベス朝様式であること」が条件となった（Barker & Hyde, 99)。近接するゴシック様式のウェストミンスター・アビィとの調和への配慮もあるだろうが，エリザベス朝から中世への先祖返りをしてまでも「イギリス的な姿」が志向されたことが分かる。「様式間の戦い」は，何をもって正統とするか，という国家イデオロギーの問題でもあった。

この「様式間の戦い」は，単に建築家の間で交わされたものではない。ヴィクトリア朝を通じ

て二大政党による政権の交替が繰り返される政治形態が続いたイギリスでは，政権が交替するたびに政策が変わり，公共建築への出費もそのつど認められたり中止されたりした。また政権が替わるごと，建設局のトップが替わり，その人物が公共建造物はローマ風古典様式でなければならないと考える立場だったり，ゴシック様式を推進する人物だったりするという事態が1855年から世紀の変わり目まで続いた（Port 101-26)。これではパリにおける近代バロック様式に統一された大改造に匹敵する都市改造が行えるはずもない。また「何をもって正統とするか」についての目まぐるしい変化のために，「完成後20年経っても笑いものにならない建物をつくる」のも難しくなる。

このように，ロンドンのアイデンティティを何に求めるか，「新しいローマ」かイギリスの独自文化か，それとも世界経済の中心にある先進性と活気か，については19世紀をとおして一定の見方があったわけではない。ロンドンは「新しいローマ」と意識的に呼ばれることも，「怪物」と呼ばれることもあった。そのような状況ではあったが，ローマ帝国の支配による平和を“Pax Romana”と称したことにならって，大英帝国の支配による世界秩序維持を“Pax Britannica”と認識することにも典型的に表れているように，大英帝国をローマ帝国と重ね合わせる言説は，19世紀を通じて続いた。そしてローマ的な視覚効果も続いて用いられた[3]。

3　みやこの表象・みやこの思想—明治時代の京都における不安と戦略

明治時代の京都におけるイメージ構築

ロンドンにおける古代ローマからのイメージの移植，および何をもって正統とするかという議論は，明治時代の京都を考える上で有効な視座を与えてくれる。

第1節で述べたように，19世紀初期のイギリスでは，ロンドンの姿に芸術都市の品格を与えるべく王室・政治家・建築家・文筆家たちがロンドン・イメージの刷新に努めた。ロンドンの「再イメージ化」が必要とされた背景には，政治・経済的には世界一の都市であるという自負と同時に，美的には他のヨーロッパ主要都市に劣っているという劣等感があったのは見てきた通りだ。そしてその劣等感の根底には「中心でない」ことへの不安があった。実際にはロンドンの「再イメージ化」は意図通りには進まなかったが，前述のアーノルドの指摘にあるように，ロンドンのイメージの刷新が目指されたのは，以下のような必要が意識されたからである。

1．ロンドン居住者だけでなく，国内・国外からロンドンを訪れる人々の目に，ロンドンの帝国首都としての威容を示すための視覚装置が必要。
2．一国の首都から世界の中心たる帝国首都へのスケール・アップに見合うイメージ・アップが必要。
3．帝国首都としての立場を意識した都市が，自らを芸術作品化し，帝国首都としての意義を読み取るべきテクストと化す必要。

さて，明治2年に天皇が東京に移る。それに伴って，「みやこ」と呼ぶにふさわしい3つの条件（園田24），すなわち「首都機能」「都会性」に「王宮の所在地」までがそろって，東京がみやこ性を獲得していく。みやことしての地位を失った京都は「第二の奈良」になる不安を抱える（園田77）。奈良が小規模の古都になったように，京都も単なる観光地になってしまうのではないかという不安の中で，近代化政策が進められた（井口85）。そうして打ち出されたハイカラな京都というイメージ作りと平行して，国家政策として1880年代に打ち出されたのが，文化的伝統の保存策であった。これは国際社会で一等国と見なされるべく，国家固有の伝統を誇示する必要があったためである。そこで，日本固有の伝統を一身に体現する都市という京都イメージが意識的に形成されていく。ロンドンが「新しいローマ」として再イメージ化を図ったと同様に，「国民とナショナリズムという概念に関わって，自意識的に創造された芸術作品として，あるいは読み取られるべきテクストとして」（Arnold 43）の京都像が創りだされていくのである。

今日，京都のイメージがあたかも平安京から一定であるような錯覚を観光客が覚えるとすれば，そのような一貫した伝統の上に立つ京都というイメージは，明治時代にできあがっていった。首都でもなく，王宮の所在地でもなくなった京都が，日本本来のみやこの姿を宿しているという，イメージとしての「みやこ」性を今日まで保持しているのは，この文化政策にのって，平安時代以来の「純粋な日本文化」の正統な後継者であるという都市像を打ち出したからである。

このように，「純粋な日本文化」を今に伝えるのが京都である，という京都イメージは，京都が「みやこ」であり続けるために有効な，「文化の正統性」を国内外に発信できるイメージであった。京都のイメージが平安京の昔から不変であったのではなく，政策に従って伝統を新たに創出することによって，明治期に「不変のイメージ」へと変化したことが分かる。

この「平安時代以来の」ということに関して，実際には京都盆地内にほとんど平安京の遺物が残っていない（高木151）にもかかわらず，京都の姿が平安京の昔を偲ばせるというイメージを与える必要があった。1895年の平安神宮の創建はその文脈で捉えられる。また京都御苑の周囲を現在見られるような石垣で囲むことによって，天皇の住居ではなくなった御所を王宮空間として保持するとともに，その空間を拡大し，同時に神秘化した（高木131）。平安神宮の神幸祭として1895年に始まった時代祭も，「平安時代から明治維新までの各時代の風俗の変遷を示す」（『広辞苑』）という形をとることによって，各時代の変化よりも，京都の平安時代からの継続性が視覚的に強調される祭りである。

御所の整備や平安神宮の創建，時代祭が視覚的に「国風文化」を演出する装置だとすれば，同時期の岡倉天心の努力は，言説による「国風文化」の演出だと言える。それらの背後には「中心ではない」ことへの不安がある。

そもそも「日本人」というアイデンティティは「外からのまなざし」を受けてはじめて生まれるものである。「純粋な日本文化」ということに関しても，今日の教科書的常識と見なされる「純粋な日本文化」が平安時代から始まったという認識も，岡倉天心により唱えられた日本美術史の時代区分を踏襲した言説によって広まり，教育を通して常識となったものと指摘される（高

木131)。また岡倉の言説は「「日本の美」の極限の姿を，はるか昔の「舶来文化」，東大寺正倉院の御物と法隆寺宝物に求める近代日本人の美意識の原点ともなったのである」(小路田62)。

> 奈良の寺々は，唐代の文化，および，当時燦然として隆盛をきわめ，この古典期の創作に多大の影響を与えたインド芸術をあらわす作品に富んでいる---それは，かくめざましき時代の宗教的儀式や哲学はいうまでもなく，音楽，発音，式典，衣装までもそのままに保存してきた国民に至極当然な祖先伝来の財宝である。(中略) 日本を，一方においては近代的強国の地位に押し上げると同時に，アジアの魂に常に忠実にとどまらしめているものは，他ならぬこの粘着性である。
>
> 日本の芸術の歴史は，かくして，アジアの諸理想の歴史となる---相ついで寄せてきた東方の思想の波のおのおのが，国民的意識にぶつかって砂に波跡を残していった浜辺となるのである。(中略) われわれにおける芸術は，他所におけると同じく，われわれの国民文化の最高最貴なるものの表現である。(岡倉　21-23)

岡倉天心には「日本はアジア文明の博物館」(22) という発想があり，奈良時代に吸収した文化が日本独自に洗練されたものが藤原時代の「国風文化」ということになる。「国風文化」は日本独自でありながら，その原点において国際性を持っているという言説である。ちょうどロンドンが「新しいローマ」という再イメージ化によって自らをヨーロッパ世界の中心に位置づけようとしたように，岡倉の考え方は，アジア大陸の東端に位置する小国という地理的アイデンティティではなく，汎アジア的視野から見て中心とは言えないまでも過去のアジア文化の宝庫であるという歴史的アイデンティティを確立しようとする努力だと言える。そして「国風文化」が藤原時代の京都に花開いたという見方は，一地方都市になりさがることを恐れていた京都を，日本の中で伝統文化の中心をなす特別の都市と位置づけ，他都市から差別化するに役立つものであった。

結び

19世紀初期のロンドンで「何をもって正統とするか」の問題において利用されたのが，古代ローマのイメージであった。ヨーロッパの西端に位置する，さほど大きくもない国という地理的アイデンティティではなく，世界の海を制覇し，広大な植民地を擁する帝国というアイデンティティを確立するために，「新しいローマ」という言説は有効であった。このように伝統は必ずしも連綿と続いてきたものではなく，伝統として新たに認識されるもの，あるいは新たに作られるものもある[(4)]。明治初期の日本といえば1800年代の後半にあたるから，イギリスでは「様式間の戦い」が続いていた頃である。つまりロンドンにおいても，「何をもって正統とするか」について絶えず考えが揺れていた時代である。日本が一等国の仲間入りをすべく，イメージ・アップのための制度整備や国家としてのイデオロギー整備を進めていた時代に，モデルとした都市の一

つがロンドンであったが，そのロンドン自体が一定の自己イメージを持っていなかったということになる。そのような時代に，京都のイメージを何とも短期間で戦略的に作り上げたことは驚嘆に値する。

1895年には平安神宮創建と同時に，内国勧業博覧会も岡崎で開かれ，近代化と国風文化の伝統が京都イメージの2つの柱として提示された。近代化の先鞭をつける商工業都市モデルと，古都としてのアイデンティティの両者が岡崎に同時に視覚化された。その空間は，古都でありながら先進性を持った都市という，今日までも続くイメージが視覚化されたシンボリックなトポスであった。

このように明治時代の短期間のうちに，積極的に新しい京都イメージを構築する努力がなされたのである。それが恒久的なイメージとして受容されていくプロセスと，そこに否応なく起こってくる保存と開発の理念の葛藤については，稿を改めて論じることになる。

注

＊この論文は平成18年度科学研究費補助金基盤研究（C）に採択された「京都とヨーロッパ主要首都のイメージの生成・受容・流布・変容に関する比較文化研究」（課題番号:18600007）の研究成果の一環として発表するものである。
＊英語文献からの訳は全て拙訳である。

（1）愛国主義的なトーンは，ソーンが講義の中にシェイクスピア劇からの引用をちりばめたことによっても形成されている。シェイクスピアはソーンの時代のロマン主義文学・絵画に大きなインスピレーションを与えたのだが，そこにはシェイクスピアをイギリスの国民的作家と見なす再評価があった。ソーンの建築・都市景観の理想は古代ローマにあったが，彼の古典主義には当時のロマン主義が大きく影響していると考える。この古典主義とロマン主義の錯綜という問題については稿を改めて論じる必要があるだろう。

（2）この計画はロンドンでは二転三転し，どこに何を建てるかでもめた。1801年の連合で事実上イギリスの植民地と化したダブリンでは，いちはやく1808年に，ネルソンの記念塔が町の中心部に建てられたのと対照的である。国民の英雄崇拝熱も，遅々として進まないロンドンの都市改造計画の遂行を速める力にはならなかった。

（3）ただし，ちょうどガンディが描く都市改造なったロンドンの想像図が，建設途上の姿か廃墟となった姿か判然としないように，大英帝国をローマ帝国と重ね合わせる言説には，帝国の繁栄だけでなく帝国の衰退と滅亡への不安も表れている。この不安は18世紀のヘンリー・フィールディングにおいては，古代ローマ帝国の末期における道徳的堕落が帝国を滅亡に至らしめたという見方になる。作家であり，かつロンドンの治安改善に取り組んだ判事であったフィールディングにとって，ローマ帝国の道徳的堕落は反面教師であり，ロンドンは同様の堕落から脱することによって改善されると信じられた（Fielding 73-74）。つまりローマ帝国を越えることによって明るい未来が開けるのである。時代が下って，ソーンやガンディの建築思想には，人間の営みのはかなさと，それを超越する建築という理想が反映されている。彼らが魅せられた「廃墟の美」には，帝国の滅亡があらかじめ自明の理として前提されていたと推測される。ソーンによる貴族院の改築計画では，入り口の円形壁龕の装飾に「ローマ帝国の興亡」のアレゴリーが用いられていた。ソーンにとって親しいテー

マであったことが分かる（Richardson 263）。

しかし帝国の隆盛を寿ぐべき場所に「ローマ帝国の興亡」のアレゴリーを用いるのは，何とも不吉ではないのか。ソーンにとって，ローマ帝国とは単なる理想以外に何を意味していたのか。彼がしばしば大英帝国をローマ帝国に重ね合わせたとき，大英帝国のはかなさまでも見据えていたのか。たとえ廃墟の姿となっても建築は生き残るのだという信念は，無常観とは無縁のものなのか。これらは今後，解明すべき課題である。これはイギリスのロマン主義における無常観と永遠の希求のパラドックスと深く関わっていると思われる。この問題については稿を改めて論じることにしたい。

（4） Eric Hobsbawm and Terence Ranger eds. *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge UP. 1983. およびその翻訳であるエリック・ホブズボウム，テレンス・レンジャー編『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭訳，紀伊国屋書店，1992を参照のこと。

Works Cited

Arnold, Dana. 'London Bridge and Its Symbolic Identity in the Regency Metropolis: The Dialectic of Civic and National Pride.' *The Metropolis and Its Image: Constructing Identities for London, c.1750-1950*. Ed. Dana Arnold. Oxford: Blackwell, 1999.

Arnold, Dana ed. *The Metropolis and Its Image: Constructing Identities for London, c.1750-1950*. Oxford: Blackwell, 1999.

Arnold, Dana. *Re-presenting the Metropolis: Architecture, Urban Experience and Social Life in London 1800-1840*. Aldershot: Ashgate, 2000.

Barker, Felix. & Ralph Hyde. *London As It Might Have Been*. London: John Murray, 1982.

Fielding, Henry. *An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers and Related Writings*. Ed. Malvin R. Zirker. The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding. Middleton: Wesleyan UP, 1988.

Gilbert, David. 'London in All Its Glory–or How to Enjoy London: Imperial London in Its Tourist Guidebooks.' Imperial Cities Project Working Paper No. 7 (1998). Department of Geography. Royal Holloway, University of London.

Halliday, Stephen. *Making The Metropolis: Creators of Victoria's London*. Derby: Breedon Books. 2003.

Hobsbawm, Eric. and Terence Ranger eds. *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge UP, 1983.

Pictorial Handbook of London. Vols. 1-3. London: Henry G. Bohn. 1854. Rpt. Tokyo: Edition Synapse, 2004.

Port, M. H. 'Government and the Metropolitan Image: Ministers, Parliament and the Concept of a Capital City, 1840-1915.' *The Metropolis and Its Image: Constructing Identities for London, c.1750-1950*. Ed. Dana Arnold. Oxford: Blackwell, 1999.

Richardson, Margaret. and Mary Anne Stevens eds. *John Soane Architect*. London: Royal Academy of Arts, 1999.

Stonestreet, G. G. *Domestic Union, Or London As It Should Be !!* London: J. Walter, 1800.

Vance, Norman. *The Victorians and Ancient Rome*. Oxford: Blackwell. 1997.

Watkin, David. *Sir John Soane: Enlightenment Thought and the Royal Academy Lectures*. Cambridge Studies in the History of Architecture. Cambridge: Cambridge UP, 1996.

井口和起「近代京都へのまなざし—修学旅行案内と京都」井口和起・上田純一・野田浩資・宗田好史『京都観光学のススメ』人文書院，2005.

岡倉天心『東洋の理想』1903. 講談社学術文庫，1986.

小路田泰直「大日本帝国の副都」『日本の歴史別冊　洛中洛外』,「歴史を読み直す」シリーズ12。朝日新聞社。1994.
園田英弘『「みやこ」という宇宙―都会・郊外・田舎』NHKブックス，1994.
高木博志『近代天皇制と古都』岩波書店，2006.
エリック・ホブズボウム，テレンス・レンジャー編『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭訳，紀伊国屋書店，1992.
吉田光邦編『図説万国博覧会1851-1942』思文閣出版，1985.

（2006年10月2日受理）
（のぐち　ゆうこ　文学部教授）